

## — 追 悼 —

## 鏑木政岐先生を偲ぶ

高瀬文志郎\*

英語の galaxy に相当する銀河という述語が初めて活字で公表されたのは、私の知る限り 1957 年の天文月報 50 巻 2 月号であった。鏑木先生の「銀河団と銀河群の距離と視線速度」がそれである。いまではすっかり定着したこの「銀河」も、かつては、天の川やわが銀河系とまぎらわしいなどという理由で使用をためらう人が多かった。そんな中でいち早くこの言葉を使われた先生のセンスの新鮮さが、いまあらためて懐しく思い出される。

鏑木先生が東大天文学科に在学された 1923 年から 26 年の頃は、ストレーンベルグ・リンドブラッド・オールトラを中心に、恒星運動の非対称性、高速度星、銀河回転といった議論がはなばなしく展開された時代であった。恒星天文学のこの活気が、鏑木先生の新しいものへの興味にかなったのであろう。先生の卒業論文のテーマは、「K 型星の速度分布」(1926 年英文で出版)であった。

学部卒業とともに、東大助手兼東京天文台助手として三鷹勤務となられたが、1928 年から 5 年間は、助手の身分のまま大学院生として恒星天文学の勉強をされた由、今のオーバードクターが聞いたら溜息をつきそうな大らかな時代であった。その間、太陽運動の非対称性、視線速度から求めた銀河回転、大マゼラン雲の回転などの論文を書かれ、1933 年には「運動星団・近距離星および高速度星から見た局部恒星系の運動」を出版して、翌年学位を受けておられる。こうして先生は日本での恒星天文学の草分けとなられた。その前後の先生の論文目録は「鏑木・宮地両教授還暦記念論文集」を参照されたい。

1935 年には東大助教、46 年には同教授となられた。当時の学生は学部 1 年で先生の球面天文学、2 年で実地天文学の講義を受けたが、48 年に私が聴いた実地天文学の後半数章は、恒星視差・太陽運動・二星流説・速度楕円体・銀河回転・銀河系力学となっている。先生はこうして後進に恒星・銀河天文学の手ほどきをされ、やがて卒業研究にこの分野を選ぶ者も現われ始めた。先生の講義ノートを開いてみると、そのままの形で出版されてもおかしくないような、完成度の高いものであったことに、あらためて感銘を覚えるしだいである。

☆ ☆ ☆

1956 年には先生を中心とする恒星天文学の会合(通称

SAM=Stellar Astronomy Meeting) が誕生した。そのいきさつについては、本誌 59 巻 10 月号(1966 年)に紹介済みであるが、この 1956 年はパロマーの 48 インチシュミットによる掃天写真星図が完成出版された年である。恒星・銀河天文学にとっての新紀元の一つともいえるこの時期、日本でこの分野をめざす研究者の数もようやく複数となっており、一方では文部省の科学研究費補助金などに基づく研究組織作りが普及し始めた時代でもあった。このような背景と、先生のすぐれたリーダーシップが、SAM の芽生えとその後の順調な成育のよい土壌となり活力素となったのである。

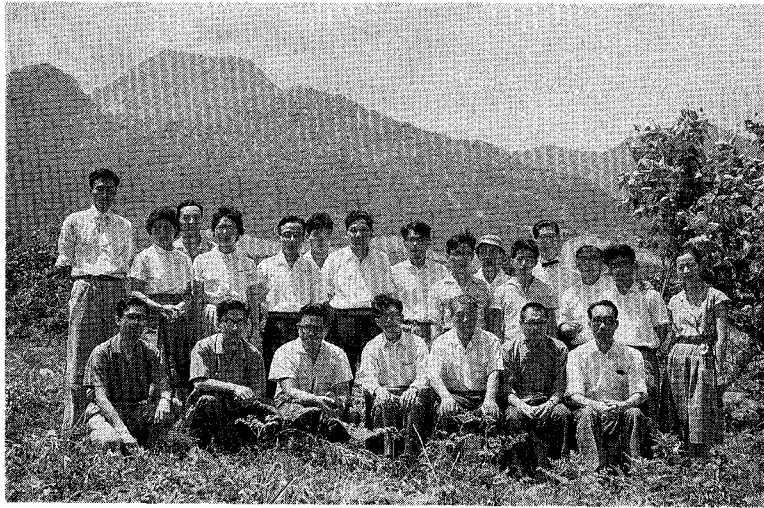
1960 年には総合研究「恒星の空間分布および運動」が鏑木先生を代表者として発足し、資金の裏づけもできたので、全国的研究会を開こうということになって、その第 1 回は 1961 年 7 月、新潟県池の平で開催の運びとなった。以来 1971 年を除いて 74 年までの 13 回、SAM 夏の研究会が続く。主として信越地方の公務員宿舎や民宿に 3~4 日間泊りこむ方式の勉強会で、鏑木先生は 1963 年に東大を定年退官された後も、第 10 回の 70 年までは毎回のように出席された。木曾シュミットの実現には、この研究会での議論が大きな推進力となり、現在に至るまで続いているシュミットシンポジウムは、SAM 研究会を継承したものであるといつてよいであろう。なお本誌 79 巻 4 月号(1986 年)には、成相秀一氏が、鏑木先生や SAM について、親しみをこめて書かれた一文がある。

☆ ☆ ☆

SAM の第 1 回会合は、当時まだ麻布の旧天文台敷地にあった東大天文学教室で開かれたのであるが、翌 1957 年に定年退官された萩原雄祐先生のあと教室主任を引継がれた鏑木先生は、本郷への教室移転について積極的な指揮をとられた。1960 年には理学部 3 号館が本郷に竣工したので、麻布教室さよならパーティーが 3 月の卒業談話会(発表者は内田豊・加藤正二の両氏)のあと、卒業生や旧職員も多数集って開かれた。古い木造建物の前で撮った当日の記念写真の背景には、完成直後の東京タワーが聳えていて、時代の流れの象徴を見る思いである。

先生は学生時代から通算すると 40 年近い長期間、麻布教室で学び、教え、研究してこられたのであるから、ここを離れるときの御感慨はさぞかし深いものがあった

\* 国学院大学 Bunshiro Takase



第1回 SAM 夏の研究会 (1961年, 池の平). 前列右から3人目が鍋木先生.

にちがいない。しかしさよならパーティーでの先生のご挨拶は、古いものへの感傷などはあまりなくて、案外さばさばした感じであったことが記憶に残っている。

理学部3号館へ移ってからは、同居の地球物理・生物化学との3教室間で構成された3号館運営委員会の委員長を定年までつとめられた。私たちに“麻布の1等地にあった天文教室を売って建てた3号館なのだから、部屋の配分などでは、天文は大きな顔をしていればいいんだよ”といいながらも、実際は十分公平な裁きをされる名委員長であった。

☆ ☆ ☆

先生には一見近寄り難い謹厳さがあったものの、それは明治人的な気骨と折目正しさに伴う表象に過ぎず、実は心温かく、包容力ゆたかなお人柄であった。豪放磊落の反面、緻密周到であり、まわりの者に細やかでしかもスマートな心遣いを示されるのが常であった。

たとえば12月のSAMをやったあと、忘年会の会食をしたときのことである。会が終りに近づいて幹事が料金をききに行くと、もう頂戴しましたとのこと。どうやら先生がトイレの序か何かにレジへ寄って全額を払った上、そ知らぬ顔で席に戻って来られたものらしい。

また天文学会の理事長を了えられた1957年春の年会のあと、理事全員30数名を東京会館グリルへ招待して、慰労の晩餐会を開かれたことも、心に残っている。

私たちの方も、せめて何かして差上げようと相談して、古稀の年の叙勲祝賀会を催したところ、席上みんなに高級なクロスボールペンを贈られた上、その直後出席の一人一人に丁寧な礼状を書かれ、受取った私たちは大いに恐縮したしだいである。

いつか木曾観測所へお越しいただいた序に、周辺を車でご案内したときのこと、途中でガソリンスタンドへ立寄った。ガソリン補給を頼んだあと、今回はこちらがトイレへ行っている間に、先生がガソリン代を払って下さっており、又しても恐縮する破目になってしまった。

とにかく、先生には敵わないというのが実感である。このような御人徳が多くの人々をまわりに引寄せたのであろう。なお先生は就職の世話の達人でもあり、学生や旧職員やSAM関係の多くの人々が、その恩恵をこうむっている。

☆ ☆ ☆

八十路に入ってもなお御壮健であられた先生は、東大および国学院大の名誉教授であるとともに、85歳の御逝去まで国土建設学院の院長であり、全国建設研修センター理事、および天文博物館五島プラネタリウムの理事兼評議員であった。昨年3月までは、天文博物館の館長をもつとめておられる。

ご家族の話によれば、昨年9月にはご郷里の金沢へ、元気で墓参旅行に赴かれたそうである。ところが11月になって体調を崩され、12月初め入院された。入院中、ご自身の苦痛を訴えられるよりはむしろ、看護に通院される奥様のお疲れを心配して、車の手配などをその都度指示されたという御子息の話をきくと、先生の細やかなお心遣いは、その御生涯を通じて、まわりのすべての人々に及んだことがわかり、やっぱり先生には敵わないと感じ入るばかりである。

先生は私たちにとって、天文学の師であっただけでなく、まさに心の師でもあった。先生の安らかな御永眠を心よりお祈り申し上げるしだいである。